

解説

サツマイモ歴史文化研究の第一人者だった井上浩先生
↳約五十年間の研究活動を顧みて↳

山田英次

(川越いも友の会事務局長、サツマイモまんが資料館館長、日本いも類研究会役員)

一 はじめに↳約四十年前の出会い↳

サツマイモの文化史研究に半生をささげた井上浩先生が、二〇二三年七月十一日に満九十二歳でお亡くなりになった。

私が井上先生に、はじめてお会いしたのは、約四十年前の一九八二(昭和五十七)年の春頃だった。すでにその頃には、川越いも歴史研究の第一人者であった。当時、川越市制六十年を記念して、地域再発見のために市民向「さつまいもトータル学講座」を、私(当時、社会教育の公民館職員だった)が企画した時に講師の一人として依頼したのが、出会いのきっかけであった。偶然にも、その時井上先生は川越いも研究会を組織して「川越いもの歴史展」を、川越の街なかの蔵造り資料館にて九月↳十二月に開催予定の準備中であつた。そのようなことから、その後の長いご縁がはじまつた。

二 井上先生の人柄と研究活動の広さ

井上浩先生は、昭和六年四月五日に埼玉県の飯能で生まれた戦中派であった。旧制川越中学二年生（十四歳）の時、勤労働員先の陸軍兵器製造工場で終戦を迎えたという。敗戦を経験して世の中がガラリと変わって、人生の価値観もまったく変わってしまったという。昭和二十九年に東京教育大学経済学科を卒業後、埼玉県立浦和高校の定時制・通信制の教師としてまず就職し、その後、全日制の社会科学の教諭となった。さらに昭和五十五年に県立松山高校（東松山市）に転勤し、定年まで勤務された。戦争体験を通して権威を嫌うようになり、生涯をヒラの教師として押し通した。エピソードとしては、社会科学のテストを行ったとき、回答ができない生徒が、サツマイモのことを書けば点数をもらえたとの逸話がある。ユニークな教師だった横顔として、私の記憶にも残っている。

人柄は、親しみ易く、何事にも行動的で、交際範囲が驚くほど広く、いろいろな方から好かれる飾らない性格であった。おいも仲間の他に、特に文化人や趣味人などの方々との、幅広いお付き合いが多かった。

井上先生の研究は、農業経済史を専攻したことから、地方の物産史が基盤であった。

奥様（和子氏）と結婚して、川越に住むようになったためか、川越地方に関する研究が多かった。埼玉県内の麦作の歴史や河越そうめん、養蚕史、川越唐棧、甘柿の禅寺丸、川越いも、入間ゴボウ、マクワウリ、サトイモなどの物産の他、民俗芸能や祭り、汚名返上のため不老川（昭和六十年当時、日本一汚い河川と騒がれた）の総合研究活動も行われた。地元では郷土史研究家として評価され、昭和五十二年から、長年、川越市の文化財保護審議会の委員を務められた。

しかし、井上先生を一言で表現するとしたら、日本のサツマイモ歴史文化研究の第一人者であったと言える。

三 井上先生のサツマイモ研究が飛躍

先生が、サツマイモ研究を始めたキツカケは、川越いもの歴史研究からであったが、それは昭和四十年代中頃だと思える。その理由を、先生は「川越に住み、高校で歴史や地理を教える者にとって不思議だったのは、川越ほどのサツマイモ産地に、その文化史を研究した人がいなかったことだ」と記している。『埼玉史談』十八巻第四号の一九七一年十二月号に「川越いもの作り初め」という小論を、最初の研究成果として発表している。

それから十年後、その小論を読んだアメリカ人のベリー・ドゥエル先生（川越市在住で、当時、国際商科大学講師で文化人類学を研究し現・東京国際大学名誉教授）が、お会いしたいと声を掛け、お二人での川越いも及びサツマイモ文化史研究がはじまった。オンラインツアーでのイモ学研究であった。

大きな変化が起こったのは、昭和五十七年秋からの「川越いもの歴史展」と公民館講座の「さつまいもトータル学」であった。また、いも料理を看板にした「いも膳」が昭和五十七年に偶然にも開店した。翌年、公民館主導で「川越いも祭」が開かれ、さらにその勢いで昭和五十九年三月に、市民運動として「川越いも友の会」が発足され、川越いも文化活動に火がついた。その中心的な立場にいたのが、井上先生であった。

四 井上先生のイモ学の主な業績

井上先生のサツマイモ歴史文化史研究の主な業績をあげれば、次のような事柄であると思える。

・川越いもの歴史解明・・・川越いもの作り初めから、江戸後期に焼き芋用の原料として有名になり、さらに甘藷増収法を確立した赤沢仁兵衛の登場や芋せんべいの歴史、芋掘り観光農業などの隆盛を研究された。

特に、私が印象に残っているのは、「江戸時代に將軍が川越いもの美味なるを絶賛した」という有名な逸話を、かなり真剣に文献調査をして、結局それは、或る郷土史研究家が話した作り話だった、との結論を得て、私に話してくれたことがある。一般に誇張して言い伝えられることは、後世の作り話である可能性があることを教えられた。

・江戸及び東京の焼き芋文化史・・・焼き芋の歴史文化をかなり詳しく取材研究され、甘藷問屋のみならず戦後の石焼き芋出稼ぎ労働者の実情や、焼き芋の販売する音声（地方によって異なる）まで調べられていた。

・紅赤の文化研究・・・紅赤は、明治三十一年に埼玉県北浦和の山田いちが発見したイモであったため、かなり詳しく研究されていた。川越地方の紅赤づくり名人に栽培技術を取材されると共に、東京の東村山市周辺でも紅赤作りに誇りをもっている農家へも足を運び、熱心に取材をされていた。

・沖繩百号（勝利百号）の歴史研究・・・井上先生は、日本で育種された沖繩百号が、戦時中に中国へ渡り、その後、普及して勝利百号となった新聞記事（一九八四年九月）を読んでいたため、六年後の、一九九〇年八月に「中国サツマイモ視察団」（川越いも友の会主催）

を組織し、中国各地の甘藷研究施設を巡った。私も同行したが、中国の育種の大家・盛家廉先生に会い、その後、その遺伝を継ぐ「徐薯十八号」が開発されたとの取材をされて、中国と日本のイモ文化の親密性を明らかにされた。

井上先生の研究スタイルは、まず図書館などで十分文献資料調査をされて、そのあと多くの現地の関係者に会い、聞き取りをされるというスタイルであった。そのため、多くの貴重な聞き書きノートを残された。発表の文体は、一般人にも分かり易く読みやすい文章で馴染みやすいものだった。日本イモ類研究会やイモ類振興情報のウェブサイトで公表されていて、多くの小論やエッセイを読むことができる。

五 サツマイモ資料館長として活躍

川越いも友の会が発足し、昭和六十年頃から川越いも文化活動が予想以上に活発になると、井上先生は「川越に、サツマイモ資料館の設置を」と唱え出し、川越いも友の会の大きな夢となった。

その夢に賛同した「いも膳」社長の神山正久氏が、結局、民営の「サツマイモ資料館」を同敷地内に建設し、平成元年四月に開館させた。当初の三年間は、私（山田）が館長を務め運営したが、平成四年四月より閉館する平成二十年六月までの十七年間、定年後の井上先生が館長を務めた。館長時代、全国のイモ産地を訪ねると共に各地のイモ関係者と幅広いネットワークを構築された。反響の大きかった特別企画展示として、終戦五十周年記念の「戦争とサツマイモ」展などを行った。また海外へは、中国やサイパン、ミャンマーなどにイモ関係で足を運ばれた。その間、いも類振興会の評議員や日本イモ類研究会の二代目の会

長を務められた。二〇〇五年の、琉球への甘藷伝来四百年記念の時には、沖縄県嘉手納町の野國總管甘藷伝来四百年祭に招かれ、長年の甘藷に関する啓蒙・啓発活動を評価され「野國總管甘藷功労賞」を受賞された。そのことが嬉しい出来事だったと、後年、文中で記している。

六 亡くなるまでイモ文化史研究に情熱

井上先生は、『埼玉史談』『武蔵野ペン』『川越いも友の会関係の各冊子』『いも類振興情報』などに、多くのイモ文化史関係の文章を発表された。二〇一七年十一月に脳梗塞で倒れられてからも、入院中にベッドの上で原稿を執筆され、その熱意は変わらなかつた。自宅へ戻ってきてからも、部屋中に原稿を広げ、執筆活動に励んでいられたという。二〇一八年秋に、川越市立博物館で開催された「川越とサツマイモ」企画展にも、歩行補助器具を使って訪れ、十一月に来訪された沖縄の伊波勝雄先生や茨城の先崎千尋先生を案内し、共にイモ文化史について熱く語りあった。先生の最後の夢は、今までの研究成果をまとめた仮称『川越いもの文化史』の書籍を出版することであった。

七月に亡くなった後、ご家族が調べたところ、約八割かたの原稿はまとまっていて『川越地方のサツマイモ文化史』という表題がついていたという。ご長男・健氏は、関係者の協力を得て、一周忌までには発刊することを決め、本書の完成に至った。戒名は、サツマイモの魅力を広く世に伝え、教師としての生涯を全うしたことに因み、「芋博浩教信士」とつけられた。